

ヴィクトリア朝以降の英国ナショナル・アイ
デンティティ構築に関する融合的研究

丹治, 愛 / TANJI, Ai

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2013-05

様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月25日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320055

研究課題名（和文） ヴィクトリア朝以降の英国ナショナル・アイデンティティ構築に関する融合的研究

研究課題名（英文） Synthetic Studies on the National Identities of England / Britain in the Victorian Era and After

研究代表者

丹治 愛（TANJI AI）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：90133686

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ヴィクトリア朝以降の（というより、18世紀末から20世紀末にいたる）英国のナショナル・アイデンティティ（イングリッシュネス／ブリティッシュネス）の歴史的変容・多様化を、おもに文学と歴史学の観点から追跡した。国民国家、ナショナリズム、産業革命、都市の拡大、帝国主義、グローバリズム、消費文化、観光学、移民、フェミニズム、文化政策などなど多様な観点を導入することによって、また、英国とその外側との関係に注目することによって、英国のナショナル・アイデンティティの多様性をその歴史的背景とともに確認することができた。

研究成果の概要（英文）：

The study focused on the historical changes and diversification of the national identity of Britain (Englishness/Britishness) from the Victorian Era onwards (to be specific, from the end of the 18th century to the end of the 20th century). By adopting such various viewpoints as the nation state, nationalism, the industrial revolution, the expansion of the city, imperialism, globalism, consumer culture, tourism studies, immigration, feminism and cultural policy, and by taking into account the relationship between Britain and the outside world, we have been able to confirm the diversity and historical background of the British national identity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2012年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：ナショナル・アイデンティティ、イングリッシュネス、ブリティッシュネス、帝国主義、グローバリズム、コモンウェルス、多民族国家

1. 研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝以降の英国ナショナル・ア

イデンティティ構築を主題とする本研究が位置づけられるべき学術的背景としては以

下の4つの流れがある。その流れを融合させながら、英国ナショナル・アイデンティティの歴史の変容を追跡するとともに、それとの関連のなかで英文学の具体的なテキストの再解釈を進めていくことをめざす。

(1) 産業革命以降の都市化の反動としての田園主義的なイングリッシュネスの確立

18世紀後半の産業革命以降、人口は都市に集中しはじめ、さまざまな都市問題を引き起こすことになるが、そのような急激な都市化への反動として、田園こそイングランドの本来のナショナル・アイデンティティを求める田園主義的なイングリッシュネス概念が確立されていく。

(2) 帝国主義的拡大への反動としてのリトル・イングランドイズム

(3) 帝国主義的拡大とそのアフターイフェクト

後期ヴィクトリア朝以降の帝国主義的拡大の結果、イングランドは民族と文化の多様化という複雑な現象をかかえこむことになった。それはイングランドの社会に豊かな多様性をもたらすものではあったが、同時に、外国からイングランドに否定的なものもちこまれるという外国恐怖症的メンタリティを生み出しもした。このような動向は、その後、現在にいたるまで、領土的支配を連合王国の国境内に縮小しようという求心的なりトル・イングランドイズムと、遠心的な帝国主義的ラージ・イングランドイズムとの葛藤を生み出しつづけている。

(4) 「想像の共同体」としての国家概念

ヴィクトリア朝は、国民国家的ナショナリズムが強力に推し進められた時代である。それは、産業革命で生じたさまざまな階級と、帝国主義がもたらしたさまざまな民族と文化を統合し、「想像の共同体」としてどのようにひとつの国民を統合するかという問題だった。

2. 研究の目的

本研究は、ヴィクトリア朝以降、英国のナショナル・アイデンティティがどのような歴史的コンテクストのなかで、どのようなかたちに構築され、そして変更を加えられていったかを現代までたどる試みであると同時に、その歴史のなかでそれぞれの代表的な文学作品のいくつかを具体的に解釈していかうとする試みである。より具体的にいえば、

(1) 国民国家の成立、産業革命の結果としての都市化の進展、その反動としての田園主義的イデオロギーの成立、帝国主義の拡大、帝国の解体後の福祉国家化および多民族国家化、といった歴史的動向をつうじて、英国

のナショナル・アイデンティティがどのように構築され変容していったか、という問題を、英文学（英語圏文学）の作品とそれと関連する他分野のテキストをとおして通時的に探っていくとすると同時に、(2) そのような歴史的動向のなかで変容するナショナル・アイデンティティとの関連のなかで英文学の作品を読みなおす、ということである。

3. 研究の方法

本研究は、各メンバーの個別の研究を踏まえながら、毎年度夏の研究会と3月の研究会およびシンポジウムを組織することによって遂行する。3月に行なうシンポジウムについては、公開するとともに、講師として国内外から講師を招いて、積極的に発信と受信を行なっていく。

また、それぞれが所属するさまざまな学会の大会および機関誌をとおして研究成果を発表していく。

4. 研究成果

丹治（研究代表者）は、アイルランドを統合して新たな連合王国を形成した19世紀初頭の英国のなかで、ジェイン・オースティンがどのようなイングランドのナショナル・アイデンティティを形成していったかを概観した。若年の彼女が傾倒していたピクチャレスクあるいはサブライムの美学における風景の概念を、その後の彼女が（画家のコンスタブルと同様に）いかにイングランド化させていったか、そしてそのことをとおしてどのような田園的な風景をイングランド的な風景の原型として創造していったかを、彼女の全作品を通読しながら論じた。

また、オースティンから一世紀後のイングランドにおいて、都市化の拡大とともに、それと反比例するごとくに田園主義的なイングランドのナショナル・アイデンティティが強化されていく「イングランドの状況」のなかで、E・M・フォスターが『ハワーズ・エンド』のなかで、その田園主義的イングランド像を、帝国主義的基盤としての産業主義的イングランドとどのように（アイロニーとともに）統合しようとしていたかを論じた。

さらに、同性愛をあつかった同じフォスターの『モーリス』をとりあげ、同時代の帝国主義的ナショナリズムが前提していた国民の理念から逸脱した「他者」としての同性愛者を主人公とするこの物語が、田園主義的イングランドのイメージをとりこみながら、どのようなユートピア像を構想しているかを論じた。

富山は、イングリッシュネス研究の理論的な前提を再確認する一方で、具体的なテキストのなかにイングランドの国家像がどのよ

うにあらわれているかを問う仕事をした。具体的には、18世紀から20世紀にいたるさまざまなイギリス小説に関して、「そこに現前するにもかかわらず[黒い肌の人々]が不在化されてしまう文化のメカニズムを再考」することをとおして、イングリッシュネス概念の人種的偏りを指摘しつつ、「大きな物語」の外側に追いやられている見慣れぬ世界観や歴史観を再構築するところにポストコロニアリズムの可能性を見出している。

また、18世紀前半のダニエル・デフォー『大英国回覧記』と、19世紀前半のウィリアム・コベット『農村騎馬行』という二つの国内的な旅行記を比較しながら、その差異のなかに「イギリスがひとつの国家として整備されてきたという歴史のプロセス」を認め、また、「愛国的な癒しを内包するピクチャレスクの枠組み」の拡大を確認している。

草光は二つの分野で成果をあげた。第一の成果はヨーロッパにおける植物学の進展が非ヨーロッパとの出会いによって飛躍的に前進したことを論証し、それが逆にイングリッシュネスへの自覚(たとえばイングリッシュ・ガーデン)、さらには帝国主義的な枠組みへの自覚と反省、などのさまざまな思潮を生み出しことである。植物学研究は旅や移動をとめない、それは研究者自身の場合もあれば、植物そのものの移動もある。イギリスそしてヨーロッパがグローバル化していくことによって必然的に開けてくる、新しい自然世界をいかに自国の自然との関係で認識し解釈しようとするのか、18、19世紀のイギリスの植物学者や園芸にたずさわった人びとを通して、イギリスの文化を捉え直す道筋をつけることができた。

第二の成果はヴィクトリア朝の中世主義に関するものである。近代における中世主義・中世趣味はイギリスに限った現象ではなかったが、イギリスでの展開はやはり特殊であった。それはイギリスの歴史をどう解釈するかに関わる問題であるが、18、19世紀の歴史家や、故事物愛好家、文人たちが「自分たちの過去をどのように理解しようとしたか、そしてそれは新しい歴史認識にどのような特色を付け加えたかについて調べ、それが19世紀に花開く中世主義的な言説に与えた影響について研究を進めた。

中井は20世紀英国の移民文学・文化を主として行い、(1) C・L・R・ジェイムズを中心とする20世紀前半の移民文学・思想、(2) 20世紀後半、とくに1980年代以降の移民文学・文化に焦点を当てて研究した。

(1) に関しては、C・L・R・ジェイムズの30年代の名著『ブラック・ジャコバン』を中

心に、20年代から60年代初頭にかけてのさまざまなジェイムズの著作を収集・分析し、ヴァージニア・ウルフに代表されるような英国のハイ・モダニズムの言説と比較することによって、同時代のコスモポリタニズム思想の今日的な可能性を探求し、論文として発表した。また、ジェイムズのような正統的な作家以外に、同時代の移民女性のテキストを調査し、トルコ人女性が匿名で出版した手記を中心とする論文をまとめ、共編著『ジェンダー表象の政治学』に収録したほか、2011年にイスタンブールで開催された国際学会で口頭発表を行った。

(2) に関しては、文化史的なアプローチにより、主として英国ムスリムの問題に関する調査・分析を行った。パキスタン系2世ハニフ・クレイシの多彩な著作および活動、シャビーナ・ベグム事件に代表されるような英国ムスリム女性の「ヴェール」の問題、映画におけるムスリム表象などに焦点をあてて論文を発表し、英国多文化主義政策の21世紀における影響を考察した。

西川は、近代以降のイギリス社会における余暇活動や観光の展開を、主にナショナル・アイデンティティの形成や、中流市民階級による支配的価値意識の構築という論点から跡づける研究を行った。たとえば、18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリス社会において、社会的に影響力を強め始めた中流市民層によって、祝祭性を伴うことも多かった民衆娯楽や伝統行事のいくつかが「野蛮」「非文明的」であるとして抑圧され、それに替わって「合理的な」レクリエーションが、標準化された国民文化の構築に向けた一種の社会統制として推奨されていく様を論じた。

また、イザベラ・バード『日本奥地紀行』について、一般的にはヴィクトリア朝時代の女性冒険家による僻地紀行文として位置づけられるこのテキストの背後に、オーセンティックな土着文化との出会いを求める中流的な価値意識や、パイオニア的な女性の地理学研究者として成果を挙げたいという帝国主義の経営戦略とも結びついた動機が潜んでいることを論じた。

さらに、ジュリアン・バーンズの『イングランド・イングランド』(1998)をとりあげ、そのストーリー展開を、記号化されたナショナル・アイデンティティにもとづいた、シミュラクル性の強いテーマパーク建設と、伝統的な農村社会における共同性に裏打ちされた生活の実体という二つの要素を軸に据えて分析した。

アルヴィ宮本は、18世紀末から19世紀半ばにかけて、イギリスの帝国主義的進出、ヨ

一ヨーロッパを中心としたグローバリズムの中で、異国の文物が、いかにイングリッシュネスと結びついていったかを検証した。

具体的には、まず、イングリッシュネスとグローバリズムとの複雑な関連を、“poison tree”というメタファーに焦点をあてて、イギリスが帝国主義的な進出を始めたロマン主義の時代からヴィクトリア朝にかけて検証した。本来異国の植物であるがゆえにマイナスのイメージを増大させていたジャワのウパスが、帝国主義といかに結びつき、イギリスに移植され、その生態が明らかにされる中で、いかにイギリス的な想像力に取り込まれ、イングリッシュネスと深く結びついたメタファーとなったかを明らかにした。

もう一つの成果は、イギリス・ロマン主義の第二世代の詩人の中でも特にイギリスの帝国主義、グローバリズムに批判的であった Percy Bysshe Shelley が、イギリスを離れてイタリアで生活する中で、イギリスを外から眺めることによって、その帝国主義的進出について広い視点からさらに深い洞察を持った批判をすることが可能になり、また、ヨーロッパ的なものと対比しつつイングリッシュネスという概念を深めていったことを具体的に検証した。

原田は、ニュージーランド（白人）女性の国際意識及び人種関係におけるイギリス帝国の影響を主たるテーマとして取り組んだ。20世紀前半にニュージーランドが国家として求めたアイデンティティは、イギリス国内における貢献と表裏一体のものであったが、女性運動に目を転じてみると、帝国は彼女たちの国際的連帯のそもそもの基盤であったと同時に、女性たちに強いた理不尽な国籍法等によって〈反女性的〉な体制として立ち現われるという二面的な構造を持っていたと考えられる。また、帝国がニュージーランド女性の他者意識に及ぼした影響を評価する一つの指標として、大戦間期に生じ始めた帝国外の連帯の枠組みや、先住民マオリ女性との関わりに着目した。帝国外の連帯に女性が目を向けたとき、19世紀から帝国の文脈の中で形作られてきたパケハ（白人ニュージーランド人）の人種意識は、一定の挑戦を受けることとなる。特に1920年代後期に発足した汎太平洋女性会議に着目し、ニュージーランド国内の新聞や機関誌の報道、また比較として日本代表団の機関紙記事等の調査を続けている。

浜井は、戦後の移民流入によりイギリスにおけるナショナル・アイデンティティのあり方に生じた変化に関する研究を進めた。イギリスは戦後、旧植民地からの移民が流入したことにより、帝国主義時代の拡張的なブリテ

ィッシュネス概念（例えば、1948年国籍法は、インド独立の翌年というタイミングで制定されながらも、コモンウェルス、特に旧ドミニオン諸国への配慮と執着により、コモンウェルス市民をも含めたかつての「帝国臣民」に自由な入国の権利を保障した）と、「白人性」と（また、状況に応じて「イングリッシュネス」とも）密接に結びつく、より排外的なブリティッシュネスとの矛盾が移民問題という形で噴出することになったと言える。イギリス政府の政策は、コモンウェルスへの配慮と執着が薄れる1960年代初頭から、カリブ海諸島やインド亜大陸などかつての帝国からやってきた「兄弟たち」を閉め出す政策へとシフトし、1970年代初頭に生じたウガンダからのアジア人流入危機においても、彼らはナショナルなコミュニティから排除される「非帰属者」としての扱いを受けることとなった。この4年間の研究では、実証的に上記のような事例を検証するとともに、戦後移民の流入とイギリス社会の多文化化という現象をイギリス史、イギリス帝国・コモンウェルス史のより大きな枠組みの中に位置づけるよう試みた。

渡辺は、国内外の文化政策の観点から、20世紀における Englishness の変容について考察を行ってきた。問題提起として、①イギリスの文化政策がいかなる Englishness（あるいは Britishness）像を「自覚的に」打ち出してきたのか、②実際の文化政策にみられる「手法」そのものが、いかにイギリス的であるか、を掲げ、研究対象として、国際文化交流機関の「ブリティッシュ・カウンシル(BC)」と、イギリス国内における芸術振興を行う「アーツ・カウンシル・イングランド(ACE)」を選んだ。

①については、ACEよりもBCのほうが設立以来、より強烈な Englishness 像を作り上げてきたことを確認した。これは、BCそのものの設立が、戦間期、独伊による文化プロパガンダの脅威への対抗であったことにはじまり、国内の人種的・文化的変容がどうあれ、ステレオタイプ化した「イギリス文化」や英語という帝国主義的な言語を海外に発信する必要があったためと思われる。一方のACEは、それ自体が予算分配機関であり、国内経済活性化のため、国家色が顕在化しにくい現代アートの多くの助成を行ってきたことから、Englishness の称揚はとくに優先事項ではなかったためである。

②については、BCもACEも政府官公庁から補助金を得ながらも独立形態を維持するという「アームズ・レングス」の原則が、まさに、政府からの統制を避けつつも民間の完全主導も敬遠する「イギリス的な」特徴を呈していることを確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

① 中井亜佐子

「彼女はなぜ去っていったのか——コスモポリタニズムと移民女性」、三浦玲一、早坂静編『ジェンダーと「自由」——理論、リベラリズム、クィア』、彩流社、査読無、2013年、pp.103-123

② Yumiko HAMAI

'Un-homely Welcome: The Resettlement of the Asians Expelled from Uganda(1972-74)', *The East Asian Journal of British History*, Vol.3, 2013年、査読有、pp.27-51

③ 西川克之

「イザベラ・バード『日本奥地紀行』の観光社会学的分析の試み」、*The Northern Review*、査読無、No.38、2012年、pp. 27-39

④ 中井亜佐子

「歴史を書くこと、未来を語ること——『ブラック・ジャコバン』と『三ギニー』の同時代性」、査読無、『ヴァージニア・ウルフ研究』第29号、2012年、pp.27-41

⑤ 中井亜佐子

「多文化主義、(新)自由主義、テロリズム」、河野真太郎他4名編、『愛と闘いのイギリス文化史1951-2010年』、慶応義塾大学出版会、査読無、2011年、pp.367-381

⑥ Asako Nakai

“Autobiography of the Other: David Dabydeen and the Imagination of Slavery.” *Postcolonial Text*, 6:2 査読有、2011年

⑦ 富山太佳夫

「動くパノラマを求めて—旅と国家」『近代イギリスを読む』見市雅俊編、法政大学出版局、査読無、2011年、pp193-254

⑧ 浜井祐三子

「近現代イギリスと移民」、木畑洋一／秋田茂編『近代イギリスの歴史』、ミネルヴァ書房、査読無、2011年、pp. 257-276

⑨ Yumiko HAMAI

“Imperial Burden” or “Jews of Africa”? an analysis of political and media discourse in the Uganda Asian Crisis

(1972)', *Twentieth Century British History*, Oxford UP, Vol.22, No.3, 査読有、2011年、pp415-436

⑩ 浜井祐三子

「近現代イギリスと移民」、木畑洋一／秋田茂編『近代イギリスの歴史』、ミネルヴァ書房、査読無、2011年、pp. 257-276

⑪ 渡辺愛子

「イギリスの対外文化政策 ～冷戦、脱植民地化、そしてヨーロッパ～」、『愛と闘いのイギリス文化史～1951-2010年～』、川端康雄ほか編、査読無、慶應義塾大学出版会、2011年、pp.303-17

⑫ アルヴィ宮本なほ子

「『毒の木』幻想とグリーバリゼーション Erasmus Darwin から Rudyard Kipling まで」『関東英文学研究』、査読有、2巻、2010年、pp.1-15

⑬ 丹治愛

「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解 都市退化論と「土地に還れ」運動」、『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、査読無、2009年、pp. 115-134.

⑭ 丹治愛

「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解への不満 貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い」、『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、査読無、2009年、pp. 135-155.

⑮ 西川克之

「ハイパーリアルな歴史とオーセンティックな記憶」、*The Northern Review*, No.36、査読無、2009年、pp. 1-15

⑯ 西川克之

「余暇と祝祭性——近代イギリスにおける大衆の余暇活動と社会統制」、『観光創造研究』、査読有、No.6、2009年、pp. 1-14

⑰ 富山太佳夫

「バーサ、ヒースクリフ、、、黒い肌」、塩谷清人、富山太佳夫編『イギリス小説の愉しみ』、音羽書房鶴見店、査読無、2009年 pp101-120

[学会発表] (計 5 件)

① アルヴィ宮本なほ子

「P.B.Shelley とイタリアの新しい声」、イギリス・ロマン派学会第38回全国大会、2012年10月20日、熊本大学

② Aiko WATANABE,

‘Purveying “British Art” abroad: the politics behind the British Council’s selection of art and visual culture shown behind the Iron Curtain’, *Art and Politics in Britain*, 2011年11月8日, University of Cambridge, at King’s College, University of Cambridge, UK

③ 丹治愛

「ジェイン・オースティンはなぜこんなに人気があるのか」タイトル＝「ジェイン・オースティンの風景とイングリッシュネス ピクチャレスクからイングリッシュへ」、2011年6月25日、学習院大学

④ 原田真見

「歴史からみる男女：ニュージーランドの女性参政権運動」、日本ニュージーランド学会、2010年6月20日、弘前大学

⑤ 丹治愛

招待講演「後期ヴィクトリア朝におけるイングリッシュネス概念の成立」（日本英文学会中国四国支部第62回大会）2009年10月24日、鳥取大学

〔図書〕（計2件）

① 草光俊雄

『アフリカ世界の歴史と文化-ヨーロッパ世界との関わり-』（北川勝彦と共編著）放送大学教育振興会、2013年、277頁

② 富山太佳夫

『文学の福袋（漱石入り）』、みすず書房、2012年、357頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丹治 愛 (TANJI AI)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：90133686

(2) 研究分担者

西川 克之 (NISHIKAWA KATSUYUKI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケ

ーション研究科・教授

研究者番号：00189268

草光 俊夫 (KUSAMITSU TOSHIO)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：90225136

富山 太佳夫 (TOMIYAMA TAKAO)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70011377

アルヴィ・宮本 なほ子 (ALUVI MIYAMOTO NAHOKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20313174

中井 亜佐子 (NAKAI ASAKO)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：10246001

渡辺 愛子 (WATANABE AIKO)

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：10345077

浜井 祐三子 (HAMAI YUMIKO)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケ

ーション研究科・准教授

研究者番号：90313171

原田 真見 (HARADA MAMI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケ

ーション研究科・准教授

研究者番号：40348298